英雄にならなくても 自分を与えることが できる

聖人になるとは、「自分とは、「自分とは、「自分とは、「自分とのを与えるのを与えるである」に、「のというである」と常に認識がいる。以下は、主に対いる。 いれる聖性に対いてする。 いれるいです。 に求めてする。 に求めてする。 に求めてする。 に求めてする。 に求めてする。

2019/01/24

聖ルカの福音書にある奇跡の大漁の 出来事は、主が一人ひとりに要求な さることを発見するために役に立ち ます。それは、往々にして理解でき ない、厳しい一言、つまり、「聖 性」という言葉に要約されます。

イエスの生涯に注目しましょう。福 音で奇跡の大漁が語られるときの主 は、有名な先生で、多くの人が探し 求め、耳を傾け、ついて行く方でし た。イエスは、ゲネサレト湖畔で2 の舟をご覧になります。「漁師たち は、舟から上がって網を洗ってい た。そこでイエスは、そのうちの一 艘であるシモンの持ち舟に乗り、岸 から少し漕ぎ出すようにお頼みに なった。そして、腰を下ろして舟か ら群衆に教え始められた。話し終 わったとき、シモンに、『沖に漕ぎ 出して網を降ろし、漁をしなさい』 と言われた。シモンは、『先生、わ たしたちは、夜通し苦労しました が、何もとれませんでした。しか

し、お言葉ですから、網を降ろして みましょう』と答えた」(ルカ 5,2-5)。

ご存じのように、おびただしい魚が 獲れる話が続きます。しかし、注目 すべき大切なことは次の点です。イ エスは、漁師たちの舟に乗り、漁師 たちを呼び、問いかけ、今している ことより、もっと大きなことをする よう励まされます。この話について 考えると、次のことが頭に思い浮か ぶかもしれません。「確かにもっと やらなければならないでしょう。で も今やるべきことで精一杯…」。こ れは普通の反応です。しかし、間 違っています。「あなたは、すべき ことの半分もやっていない。今こそ もっとやるべきだ…」と、言ってお られるわけではありません。イエス は、私たちの舟の中がどうなってい るか知りたいので舟に上られます。 これが召し出しです。私たち自身の 最高のものを差し出すようにとの呼

びかけです。奇妙なことに、この場面で、主がお呼びになったのは、漁師たちが何も捕れないまま夜通し働いた後、網を洗っていた時であったことです。つまり、主は、漁師たちが、まさに失敗したそのときに、お呼びになったのです。

ラッツィンガー枢機卿は、2002年10月6日、聖ホセマリアの列聖式当日の『オッセルバトーレ・ロマーノ』 紙の記事で、聖性に関する間違った考えがあることを示されました。

「列聖手続きでは英雄的な徳の実行があったかどうかについ場合、にこれを知ると、ほとんどの場合、聖性について間違った考えてしまれて間違と考えてしまますると、ますなと、ますながではないで、はたちがなからなかがあるとになってしまいます。「列聖手続きでは、まずないのものではない。「しかのことになってします。「列聖手続きでは、まずないのものではない。」では、まずないのものではないものものではないものものではないします。「

し、それは聖性に関する間違った考え、誤った捉え方です。そして、これこそがカギとなる大切な点なのですが、間違った考えを訂正したのは他でもない、ホセマリア・エスクリバー自身であるということです。

完全さを求める体操選手のような努 力

聖ホセマリアだけが通常の日常的な 聖性について語っているのではない ということは、ご存じの通りです。 誰の手にも届く聖性についての証言 は他にもたくさんあります。「身近 な聖人、教皇フランシスコは『喜び に喜べ』でこう表現されています。 実際、聖性について非常に危険な捉 え方があります。聖性とは、体操選 手のように努力し、全てを完璧に果 たすことだという考えです。これ は、聖人たちが体験したことではあ りません。使徒たちの経験でもあり ません。彼らが呼ばれたのは、その

時に自分自身の最高のものを差し出していたからでも、優れた人だったからというわけでもありません。聖人とは、何でも完全にやってのける人ではなく、神のみ旨が自分の生活の中で働くようにする人のことです。なぜでしょうか?それは、神に信頼しているからです。

ですから、まず言葉の意味を訂正する必要があります。例えば、日常生活の聖化、全ての人は事の聖化、全ての人は呼ばれている聖性など。「言葉を理解していば、問題が生じます。たとえばれなば、なる世性、罪、和解、ご聖体がが指し、聖性、罪、和解、ご聖体が皆によれぞれの言葉の本当の意味が皆とすることはできません。そして、

「聖性」は、ある種の倫理的完全性 や美的完全性であるとか、間違いを 侵さない人(すでに学んだのでもう 間違わないと言うような人)のもの であるかのように、誤って理解される可能性があります。

私たちが漁に大成功し勝利の夜を渦 ごしたから、主が私たちの舟にお乗 りになるわけではありません。時に は、失敗の時に、主は舟にお乗りに なります。「わたしたちは、夜通し 苦労しましたが、何もとれませんで した。しかし、お言葉ですから、網 を降ろしてみましょう| (ルカ 5.5)。漁師として、網を打つのは夜 だと知っていたし、経験もありまし たが、ペトロはもう一度網を打ちま す。魚は夜とれるということを知っ ていましたが、自分の経験よりも神 を信頼しました。そのお蔭で、「お びただしい魚がかかり、網が破れそ うになった。そこで、もう1そうの 舟にいる仲間に合図して、来て手を 貸してくれるよう頼んだ。彼らは来 て、2そうの舟を魚でいっぱいにし たので、舟は沈みそうになった| (ルカ5.6-7)。

神に信頼すれば、期待していなかっ たことが起こります。仕事を聖化す ることや、日常生活で聖人になると いうことは、何でもうまくやり、 まったく間違えないから、神様が報 いてくださる、ということではあり ません。そのように考えていないと しても、心の奥で、自惚れや嫉妬や 羨望に負けて、何か悪いことをした とき、「今こそ、主は私に罰を与え る。私は悪いことをしてしまったか らしという思いがしばしば、頭をよ ぎるものです。それは、聖性につい ての福音的キリスト教的考え方とは 言えません。同様に、家庭生活の聖 性とは、家の中が常に整頓されてい ることでもありません。幼い子供や 思春期の子供がいる父親や母親は次 のような考えにわれるおそれがあり ます。 | 日々の生活を聖化していた なら、私の子供たちは、いつも髪を きちんと梳き、手はきれいで、歯磨 き粉のコマーシャルのように歯も 真っ白だろう |。そうではありませ

ん。聖性は、日々の生活や社会生活 や家族生活の外的な完璧さではない のです。むしろ、整理整頓などだ いむりだと思うほど無秩序が支配し ているように思えても明るい顔を し、一日中何もうまくいかず、周り は混沌状態で、不完全なことこの上 ないと思えても微笑む、それが聖性 なのです。

私たちのような聖人

性はありません。しかし、(おそらく、ウィキペディアで聖人の伝記を読み、2行のまとめを読んだ後では)、聖人とは、頻繁に『神秘体験を繰り返した』人だと考える危険性があります。

事実はその反対です。聖人とは私たちと同じような人だったのです。いつもの務めから逃げませんでした。誰にとっても辛い無数の心配事や仕事のプレッシャーから逃げたから聖人になったのではありません。無数の辛いことがあったからこそ、主の慈しみを願うことになったのです。

聖性とは、人々や状況を賜物として考え、人々を愛し、日々の生活の中に神の現存を見つけることです。聖性とは、私たちが置かれた状況「にもかかわらず」達成するのではなく、正にその現実を通して達成するものです。そしてその現実とは、特に家庭や仕事のことです。特別な状

況もあることでしょう。しかし、ここで言う現実とは、何よりもまず、自分が置かれた状況のことなのです。

各自が自分の網を洗う

漁が何の役にも立たず、時間の浪費 に終わったと思えるときに、網を洗 うこと、これも聖性です。網は使徒 たちにとって仕事の道具です。私た ちにとっては、日ごろ使っているも ののことです。網を洗うとは、網を いつでも使えるように整えておくこ と、秩序の問題です。言い換えれ ば、何事をも時間通りに、常識を もって果たし、日常生活を営むにあ たり、微笑みを絶やさないよう努力 をすることです。上手く行ったもの が何もないと思えるときに、微笑み 続ける努力をします。聖性とは、何 もかもうまく運び、微笑む事ができ た、ということではありません。聖 性とは、努力したという事実、何も

獲れなかった夜の後、次の日、辛抱 して再びやってみることです。

聖性を目指す戦いは、舟同士が互い に助け合うことでもあります。おそ らく漁の時に、網が破れないように 洗うべきだったこと、網を洗うこと は網が破れないために決定的だった ことに気付きます。些細なことに気 を配ったおかげで網はもちこたえた のです。そこで、もう一艘の舟の助 けが必要となりました。聖性の戦い とは、「自分で修理すべきだ。自分 の舟を持っているのだから。私には 自分の舟がある | などと考えない で、助けの必要な人には手を差し伸 べることです。

網を洗ったり、他の舟を助けたりすることは、人々と仲良くするのに役立つ特質や徳を培うことを意味します。想定外の問題の起こり得ない、すべてが完璧な建物や象牙の塔に閉じこめられたような聖性は存在しま

せん。人々と共に生きる日常生活に おいて、特に人々に関することであ れば尚更のこと、肯定的な話し方を し、人々の善い行いを認めること が、非常に役に立ちます。一般的 に、人について肯定的な話し方を し、敬意を払う態度があれば、よい 雰囲気を作るのに役立ちます。聖パ ウロが、「互いに相手を優れた者と 思いなさい」(ローマ12,10)と勧め ている通りです。言い換えれば、愛 は人に気づかれる必要があるという ことです。言葉や身振りで愛情を示 さないで、人を愛しているとは言え ません。

主が聖ホセマリアにお与えになった 教えには、もう一つの本質的な側面 があります。日常生活の聖性とは、 人ひとりの個人的な人生だけへの呼 びかけではなく、それ以上のものだ ということです。特定の呼びかけ は、個人的な召し出しです。洗礼が 持つ種々の可能性のひとつに火が灯

されると言えるかもしれません。自 分の生活が普通の生活であること自 体、ひとつの呼びかけであると同時 に使命でもあることを、その灯火の おかげで、発見するのです。まさに 一人ひとりが、自分の生活を営むと ころに、光と愛情をもたらすという 使命を果たすために遣わされた者で あると自覚する必要があります。他 の人より立派だからではありませ ん。私たちは呼ばれたのです。優れ た点があるから選ばれたのではあり ません。ひとつの使命を与えられた のです。私たちはその使命を果たす ために、驚くべき想像力と優しさを もつ主に選ばれ、洗礼を通して派遣 されたのです。

英雄でなくても、もっと大胆になる こと(挑戦すること)ができる

何が起こったかに気づいた時、つまり自分たちの失敗の後にイエスが舟に乗られたことが分かり、その失敗

の後で逆説的そして奇跡的に大漁になったと知った時、シモン・ペトロはイエスの足もとにひれ伏して、

「主よ、わたしから離れてくださ い。わたしは罪深い者なのです」と 言います(ルカ5,8)。ペトロは恐れ を感じていました。神がお呼びに なったことに気付いたときに抱く普 通の感情です。この出会いが、何か 学問的または歴史的な問いや、別の 時代と別の人たちについての研究で あれば、恐れを抱くことはなかった でしょう。ペトロは、どのようにし て生活全体を変えることができるか と考えて、恐れを抱いていました。 個人的に協力するよう呼ばれている と感じ、今ここで自分自身の最高の ものを与えるよう呼ばれたので、恐 れを感じたのです。聖ヨハネ・パウ 口2世と若者たちとの出会いのこと を思い出しました。

聖ヨハネ・パウロ2世は、ある若者 グループが「もっと与えることがで

きる | と歌っているのをお聴きにな りました。これは、サン・レモ音楽 祭で優勝した歌です。そのすぐ後、 その場でこの歌についてコメントさ れ、とても意味の深い歌詞があった と言われました。「英雄(ヒー ロー)でなくても、もっと大胆にな る(挑戦する)ことができる。大胆 になるには、英雄的な徳が必要だと 思う人がいる。でも、すべてが英雄 的というわけではない。大切なこと は心意気であって、英雄でなくて も、もっと大胆になる(挑戦する) ことができる(聖ヨハネ・パウロ2 世、UNIVでの若者たちとの出会い、 1987年4月19日)。今とは違った人 にならなくても、主がお望みのよう な人とは異なる人間にならなくて も、もっと与えることができるので す。「このように言ってもよいで しょう。主よ、あなたは私がありの ままの私であることを望んでおられ ます。でも、自分自身の中で最高の 状態でありながら。 | それは、写真

ルチアーニ枢機卿は、ヨハネ・パウロ1世になる数週間前に、ホセマリア・エスクリバー・デ・バラゲルで当時はまだ列福されていません)、仕事を「日々の微笑書」になることを教えてくれたと書かれたとを教えて、聖性は、別にあり、友人の限力にあります。とに対して微笑むということに対して微笑に対して微笑です。私たちは御父の愛情のこもっています。

た眼差しを受けていると知っているからです。聖ヨハネ・パウロ2世が言われました。英雄(ヒーロー)になる必要はありません。英雄にならなくても、もっと多くを実現させることができるのです。

イエスは、私たちのそしてペトロの 恐れをよくご存じで、理解なさって いるので、「恐れるな」とおっしゃ います。その少し前に、ルカの福音 書で弟子たちの精神状態を上手に描 写しているところがあります。 | と れた魚に、シモンも一緒にいた者 も、皆驚いた」 (ルカ5.9) 。シモン の仲間、ゼベダイの子のヤコブとヨ ハネも同様でした。キリストのすぐ 近くにいた三人の弟子たちも、呼ば れた時には恐れを感じ、そして「驚 いた」ということは、私たちの慰め になります。次のように考えたかも しれません。「ありえない、自分は 預言者ではない、聖人でもない |。 イエスはシモンにおっしゃいます。

「恐れることはない。今から後、あれたは人間をとる漁師になる」(仕事とる漁師になる」(仕事をとる漁師になる」、合力をするだけでなる。自分ののよりのでなる。と言われたのでは、ではない。今からでは、「1度限り」と感じるといるでは、「1度限り」を感じるといい。自然には、「1度限り」を感じるといい。自然には、「2000年では、「2000年では、「2000年では、100

聖ホセマリアの典礼上の祝日は6月26日です。帰天(1975年6月26日)の数週間前、聖ホセマリアは、司祭 叙階50周年を祝い、ごく自然に自分の生涯を振り返りました。「この50年間をまとめてみたいと思いましたが、大笑いしました。自分自身を笑い飛ばし、また、私たちの主に対して感謝の気持ちでいっぱいにもなり

ました。全てをなさったのは主だか らです」。

これこそ私たちが呼ばれている聖性 です。「今から、仕事も人間関係も 子供たちも自分の思う通りになるだ ろう | と言う人たちの聖性ではな く、最後には、全てをなさるのは神 であると気が付く人たちの聖性で す。福音書に描かれた使徒たちの召 し出しを黙想する時、ペトロもヤコ ブもヨハネも、後でまたたくさんの 間違いを犯したにもかかわらず、イ エスは彼らを呼び続けられたことを 思い出すと、役に立ちます。聖性へ の呼びかけは、毎日繰り返されま す。一回限りのことではなく、日々 新たにされるものなのです。聖母以 外にこの世に生きるあいだに罪を犯 さなかった聖人はいません。主は、 罪があるからといって子供たちから 離れることはなく、間違えたからと いって私たちの家から遠ざかること もありません。それどころか、毎

日、私たちの舟に乗ってこられます。私たちにできることは、主をお迎えし、実り多く素晴らしい人生を約束しておられる主を信頼することです。

そして、聖母のように、「お言葉どおり、この身になりますように」 (ルカ1,38) と日々応える努力をしましょう。

Carlo De Marchi

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/eiyuni-naranakutemo-ataeru/(2025/12/17)